



NO.463

R8年3月1日

-発行-

〒869-1217

熊本県菊池郡

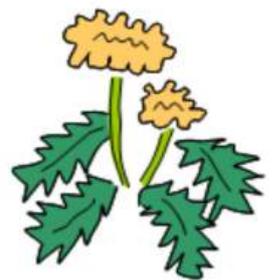
大津町森54-2

社会福祉法人

三気の会

三気の里

☎096-293-8100



そして、十年

理事長 松田 健

熊本地震からやがて十年が経ちます。過ぎ去ればあっといふ間ですが、私は、長く感じました。今でも、いま大きな地震がきたらどうしようと考え、恐怖のため眠れなくなることがあります。特に他の地域で大きな地震があったときはそうです。十年前の地震の前までは熊本はほとんど大きな地震がない地域でした。自らの身に起きて初めて地震の恐怖が実感できました。

コロナ禍においても同じです。初期の頃の絶対に感染してはいけないという恐怖と毎日日本国中、いや世界がたたかっています。

そして、時が過ぎ、コロナが日常生活の大きな部分を占めていた時期が終わりました。しかし、一部分としては存在します。

流行る可能性は十分にあります。

同時に、インフルエンザや感染性の病気が年に数回三気の里において今でも流行します。今後におきましても常日頃から消毒、手洗い、うがいを行っていきます。改めて施設職員としてすべきことを考えていきます。

1. 利用者さんに関して、個々の能力を最大に引き出せるようにします。多くの機会を与え、多くの経験ができるようにします。快適な生活が営まれるようにします。命を守る仕事です。事故防止には万全を期します。

2. 家族に関して、家族との信頼関係が成立するように、聞く態度・話す態度をきちんとします。伝達、依頼事項を忘れないようにしていきます。ご意見や苦情が上がった場合は真摯に受けとめ、必ず応えていきます。放置した場合、2倍3倍に不満

は膨れ上がると思います。

年4回の家族会には出来るだけ参加していただけるようスタッフ側も意識してまいります。利用者の情報を伝え、資料や記録を用意し分かりやすく説明できるように努力することにより、参加して良かったという気持ちを持っていただけるようにします。欠席者に郵送で資料を配布します。一言添えることも忘れないように指導してまいります。

家族への報告を徹底します。特に、怪我や病気の連絡を怠らないようにします。

3. スタッフは、職種の違いはありますが、利用者の育ち・暮らしを創っていることでは共通しています。お互いの大変さを認め合い、相互理解を深めるよう訴えていきます。

の仕事である場では利用者が一番迷惑をかけます。そしてスタッフ間も信頼関係が成立しません。私も心に強く銘記してまいります。創設者田中稔先生の「三つの約束」を守ります。「遅刻をしない」「勉強をする」「やめる時はきちんとしてやめる」を守ります。

提出期限を守るようにします。私は、この「たんぽぽ」巻頭言原稿の提出期限を守っていませんでした。今後は、初心に戻り、きちんと守るようになります。

十年間でぽっかり空いた穴を埋めていきたいと思えます。すべきことが沢山あります。一つ一つ丁寧に仕上げていきたいと思っています。

暖かくなってきました。桜ももう少しで咲きほころぶことでしょう。そして、次の十年もきっと満開の花が咲くのだと思います。





### 「振り返りと今後」

毎年書いていますが、1班利用者さん24名、スタッフ11名で無事1年間完走できたこと最高の成果です。年度始めに班スタッフの今年のテーマとして、「利用者さんのQOL向上」を掲げました。QOL向上には、生活環境などのハード面と合わせて、関わりなどのソフト面の見直しも必要となります。取り組みは広範囲ですが、スタッフ一人ひとりが利用者さんを思い取り組んでくれました。余暇支援に注視し外出や外食の機会を昨年度の倍に増やしてくれました。利用者さんの声に出せない思いに対して行動をデータ化し、より暮らしやすいよう日課を変更してくれました。利用者さんの意思伝達、理解が円滑に進むよう共通のツールを作成してくれました。まとめると、より具体的で細やかな関わりが1年間を通して実践できたように感じています。しかし、残された課題はまだあります。「三気の里で暮らせて良かった」と想ってもらえるよう次年度も継続して取り組みます。

業務課長 本田 誠



### 「感謝」

今年度2班は、利用者さん24名、職員10名でスタートしました。先ずは1年間誰一人欠けることなく過ごせてきていることに感謝しています。以前の班ニュースでもお伝えしましたが、今年度は作業活動において、大きな変化がありました。作業をフルーツキャブ作業に1本化し、作業の流れや利用者さん個々の作業工程の見直しを行いました。利用者さんによっては大きな変化と感じられた方もおられると思います。それでも大きな混乱なく移行されたように感じました。そう感じられたのは、利用者さんの頑張りは勿論ですが、日中作業を中心に支援しているベテラン非常勤支援員さんの日々の支援の積み重ねがあってこそだと思っています。非常勤の支援員さんに「感謝」です。そして、非常勤支援員さんからあがってくる利用者さんの日々の変化や気づきに対して、自助具や配置、支援を工夫しながら対応している支援員にも「感謝」です。振り返ると、利用者さん、支援員ともにそれぞれの役割を果たしながら生活されています。皆さんの日々の頑張りに「感謝」です。

皆さんに「感謝」を伝えながら、今年度をしっかり締めくくりたいと思います。

支援課長 岩田 幸児

### 「いつも通り」

3班利用者さんの平日の「いつも通り」は、起床→身なりを整え→朝食→歯磨き→掃除→作業棟に移動→野菜の袋詰め作業です。この「いつも通り」の生活を揺るがす危機を迎えました。野菜の袋詰め作業を頂いている取引先から、改装工事の為に1月中旬から1ヶ月間、作業を提供できないとの連絡がありました。危機です。利用者さんにとっての「いつも通り」だけでなく、毎日の日課はスタッフにとっても「いつも通り」を意味します。

この1ヶ月間の日中活動をどうするか、どういう言葉で伝えるのか、会議を設け、班スタッフ全員で考えました。〇〇はどうか、△△はどうかなど、様々な意見が出て、新たな希望を見出す時間となりました。

1月中旬を迎え、作業の無い1ヵ月が始まりました。体操に散歩、創作活動に他の班の作業の手伝いなど、とても充実しており、あっという間に作業再開日を迎えました。日課の変更に戸惑いがある中で、毎日違うスケジュールを乗り越えた利用者さん、「いつも通り」が変化することへの不安を、身を持って体験し、準備をすることの重要性と新たな引き出しを得ることができたスタッフ、「いつも通り」の幅が広がり、成長できた良い期間でした。

主任支援員 友尻 陽也

### 「月日のながれ」

先日片付けをするなかで、15年以上前に撮られた4班の皆さんの写真が出てきました。スタッフも含め写真に写っている4班の皆さんは、髪の毛も黒々としており、顔や体はふっくらと張りがあり、またすらっと筋肉質で写真からも機敏さが感じられ、若さを感じる事が出来ました。あの頃の皆さんからすると、見た目や身体的な変化はありますが、今現在50代から70代になっている4班の皆さんに改めて目を向けてみると、“まだまだ元気に頑張っているよ!!”という思いもあります。

毎日下請け作業に取り組み、技量は以前に比べても落ちてはいませんし、作業量もほぼ変わりません。

「お互いに歳をとりましたね」「でも、まだまだいけてますよね!」とみんなで大笑いしたのです。

主任支援員 石丸 直美



### 「BeTREEレクリエーション」

今回、BeTREEはレクリエーションで市内に出かけ、ランチとボウリングを楽しみました。まずは到着後、ラーメンー蘭、カフェブンゾー、ココ壱番屋カレーの3グループに分かれ、ゆっくり昼食を堪能しラーメン、カレーのグループは食後にカフェへ移動し、事前にメニュー選択していた為、スムーズに注文することができ、大満足の昼食となりました。その後はスポーツ熊本に集合し7つのチームに分かれボウリング大会がいざスタート! 今回、チーム名が「エトライツ」「ドリカム」「Sexy・one」「荒野の用心棒」etc…それぞれのチーム名を第1投者が考えて決めてくれました。ボウリングの玉を投げる姿も、皆さんパワフルで、じーっと狙いを定めては、ストライクやスペアを次々に出され、私自身も久々でとても楽しいゲームを行うことができました。

今回は、アーケード街のたくさんのお店を眺めながら歩き、春の陽気を感じる事ができた熊本市内でした。また、お休みの日にぜひ遊びに行かれてくださいね。

支援員 中牟田 真奈美

# 療育雑記

「生活介護」と「働くこと」

主任 森田康之

16年間所属していた入所部から就労継続支援B型事業所へ異動となり1年が経とうとしています。「これまで当たり前前だったことが当たり前ではなかった。でも、どこか繋がっている部分もある。」そんな不思議でカルチャーショックのような気持ちで日々を過ごしています。今回はそんな不思議な気持ちのままを書かせて頂きます。勉強中の身で総論染みた文章になることをご容赦ください。

障害福祉の現場で、日中過ごす場所である「生活介護」と「就労継続支援B型（就労B型）」。

制度上は別物ですが、実際に現場に立つと、その境界線は驚くほど曖昧（あいまい）です。この「戸惑い」を解（ほどく）作業に四苦八苦しています。かつて、学生時代に学んだ福祉の世

界には「障がいが重ければ生活介護、軽ければ就労B型」という目に見えない仕切りがあったように感じます。もちろん、今はその考えが通用しない時代になっています。

生活介護は、食事や入浴などの支援が中心ですが、それ以上に「心穏やかに過ごせる環境づくり」の専門性が求められます。一方で、就労B型は「働く場所」です。しかし、実は「働くこと」で得られる達成感が、利用者のパニックや混乱を鎮める。いわば特効薬になることも珍しくありません。「自分も誰かの役に立っている」という実感が、どんな薬や言葉よりも本人の心を支えるのではないのでしょうか。

令和6年度の報酬改定でも、こうした「本人の意思」を尊重する姿勢が強く求められるようになりまし。障害が重いからといって、働く喜びを諦めさせる必要はありません。

就労B型で、現場を悩ませるのが「工賃（お給料）」の問題

です。就労B型は、仕事をして工賃を払うことが役割ですが、現実には「仕事よりも、まずはここにきて安心して働くこと」を必要とする利用者が増えています。最近では、生活介護でバリバリ物作りをして高い工賃を出す事業所もあれば、就労B型でありながらゆったりとした居場所を提供することに重きを置く事業所もあります。この「逆転現象」は、制度の枠組みよりも、目の前の利用者が何を求めているかを優先した結果と言えるものではないのでしょうか。

これから現場に求められるのは、事業所の名前（制度）に人を当てはめることではありません。生活介護であっても社会とつながる「仕事」ができて、就労B型であっても疲れたときには手厚い「ケア」を受けられる。そんな「いいところ取り」ができる柔軟な支援こそが、地域で共に生きるための正解だと感じています。現実的には、利用者の想いや表現をすべて汲み取り切ることが難しく、様々な事情か

ら妥協を強いられる現状もあります。しかし、利用者に携わる者として「される（受動的）」から、より一層「する（主体的）」生活に一步でも近づけるように精進しなければなりません。様々なリスクを管理しながらも本人の「やりたい」を形にする調整力こそが、求められています。

私の感じる「不思議な気持ち」は、制度がまだ個人のニーズに追いついていないことの証拠です。その違和感を大切にしながら、目の前の方が「今日一日、ここで過ごして良かった」と思える場所をどう作るか。今、改めて支援者としての姿勢を正しているところです。



# わっふる

熊本県北部発達障がい者支援センター、わっふる、主催

自閉症啓発デー2026 in 玉名  
センター長、 榎本英也

毎年4月2日は、国連が制定した「世界自閉症啓発デー」で、この日は、世界各地でシンポジウムや講演会、ブルーライトアップ等の取り組みが行われます。またこの日から8日までは「発達障害啓発週間」と位置付けられています。今年度も熊本県では、世界自閉症啓発デーinくまもと2026 実行委員会（親の会、当事者の会、行政、発達障がい者支援センター等）を中心に啓発活動が充実するよう協議を重ねています。その啓発活動の一つとして、4月2日にサクラマチや熊本城がブルーライトアップされます。（自閉症・発達障害啓発のシンボルカラーが、「ブルー（青）」で「癒し」や「希望」を意味します）

今年度のわっふるは、自閉症啓発デーin玉名 2026と題し、令和8年4月4～5日（土・日）に有明圏域のカリーノ玉名で啓発イベントを開催致します。スタッフ、ペアレントメンターさんがブルー（青）のTシャツを着て、ご案内等致します。内容は、発達障がいの方の製作品展示、書籍、支援グッズの紹介、疑似体験となっており、昨年度も『作品一つひとつに皆さんの「好き！」がたくさん詰まっています、素敵だと思いました。子ども達の「好き」なことをみつけ、自信を持たせて行きたいと思いました。』、疑似体験をして「我が子の大変さを理解出来ました。支援者の声かけ大切ですね！」等の感想を頂いています。この啓発イベントを含め、誰もが安心して暮らせる地域社会について考え、共に歩む機会にしていきたいと思っています。詳細は、わっふる、ホームページに掲載していますので、是非お立ち寄り頂ければと思っております。

# 2月写真集



# 3月スケジュール

03(火) 創作の日  
 06(金) 芸術の日  
 13(金) 温泉の日・ゴールドクラブ  
 14(土) 家族会研修会  
 18(水) 誕生会  
 19(木) 嘱託医来診  
 20(金) リハの日  
 24(火) 音楽の日  
 27(金) 新年度会議

28(土) スタッフ研修  
 31(火) 産業医職場巡視

毎週月曜日 訪問理容サービス  
 毎週水曜日 BeTREE役場販売  
 BeTREE  
 <営業時間>9:30~17:30

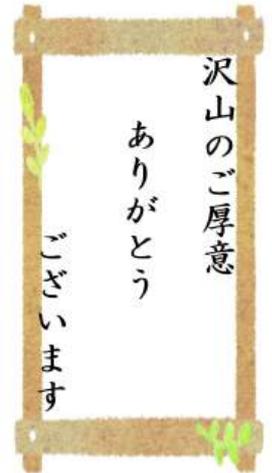


berreeJ14



【後援会ありがとうございます】  
 金森 保様  
 森川 マサミ様

【寄付物品】  
 小牧 博則様  
 森川 琇介様



## 編集後記

三月といえば卒業、別れと旅立ちの季節です。慣れ親しんだ仲間との時間を思うと寂しさもありますが、それ以上に新しい一歩を踏み出す希望に満ちた節目でもあります。

この一年を振り返ると、利用者の皆さま一人ひとりが、それぞれのペースでたくさん「できた」を積み重ねてこられました。その姿はまさに日々の小さな卒業の連続だったように感じます。

今年度も利用者の皆さま、ご家族の皆さま、地域の皆さまに支えていただき、たくさん笑顔に出会うことができました。

四月からは新年度が始まります。本誌面でも取り組みや日々の様子をお伝えしながら、利用者の皆さまの活動や笑顔、成長の姿を引き続き発信していきたいと考えています。来年度もどうぞよろしくお願いいたします。

田淵晃一